

大事を急げ

— 性善説と性悪説 —

覇権国家による他国への侵略が極めて露骨に動き始めていて、グローバル社会へと動いていた世界が一変して、保護主義、国家主義的動きへ逆戻りし始め、平和的で共生的な時代から再び、過去の国家間闘争の時代へ後戻りする動きになっている最近です。

孔子の教えを受け継いだ儒家の中で孟子(BC372年～BC289年)は、人間の本性は善であるとする「性善説」を説きました。

一方、荀子(BC313年～BC238年)は人間の本性は悪だとする「性悪説」を打ち出しました。

孟子が説く「性善説」には「仁」と「義」の二つの徳を、絶えざる修養で磨きをかけ、これを基に「王道政治」(人民に対して徳をもって臨み、人民の生活が成り立つことを最優先課題とする政治)を目指す事を理想としました。

一方、荀子が説く「性悪説」は、人間の本性は悪であるから、そのまま放置しておいたのでは社会そのものが成り立たなくなる。

そこで荀子は、悪なる本性を押さえ込むには規範が必要だとして、「礼」と「義」を打ち出し、「礼義」に基づく統治を主張し、力で押さえ込む霸道(武力や権謀をもって支配、統治すること)まで容認する立場をとっています。

荀子が活躍したのは戦国時代の末期で、孟子の時代から数十年も経っていて、各国とも政治は混乱の度を深め、それを正すためには、何よりも規範の確立が急務だとして、その拠り所を「性悪説」に求めていったのです。

そして、その門下から秦の始皇帝に仕えて専制政治(支配者が大多数の被支配者の政治関与を認めず、恣意的に統治を行う政治)の確立に貢献した李斯と法家(法による厳格な政治を行い、君主の権力を強化し富国強兵を図ろうとする政治思想)の理論を集大成した韓非子の二人の人物が出たことは広く知られたところです。

翻って、今日の世界の覇権国家(軍事的に抜きん出た国家が、他国を支配、統制すること)の強権化を見るにつけ、時代は「性善説」を説いた孟子の時代から変じて「性悪説」を説いた荀子や韓非子の時代に近似してきている様に思います。

日本は、世界でも極めて稀な「性善説」の上で成り立って発展してきた国家国民であったと思いますが、残念ながら今日の世界は荀子や韓非子の「性悪説」に立って考えて行動してゆかなければいけない時代となってきているのが現実です。

国家有つての国民である以上、我々は「あってはならないこと」であっても「ありえないこと」ではない、今までは「想定外」だと思われていた隣国からの軍事侵攻という有事に対する備えを急ぐ必要が急務となってきていると思います。

1990年代から25年以上にわたり中国の歯科医療の発展に多大な貢献をしながら、結果裏切られた苦い経験を持ち、中国の本当の国柄を良く知る人間の一人として、国防はもとより情報、経済等全ての分野で「性悪説」に立って、チャイナリスクに対しての備えという「大事」を急ぐ必要性を強く感じる最近です。

徳真会グループ
代表 松村 博史



彼岸花